
一日遅れのクリスマス

春野天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一日遅れのクリスマス

【Nコード】

N3203B

【作者名】

春野天使

【あらすじ】

俳優と女優を目指す恋人のパウルと私。彼はついに映画のオーディションに受かったみたい。なのに、クリスマスが近づいてきてもパウルはどこかに行ったまま帰って来ない……。

(前書き)

これは「クリスマス」のお題小説です。

「やったよ！ ユーリエ！ やつと仕事が決まったんだ！」

クリスマスイルミネーションが、街を彩り始めたある日の午後。パウルは私の顔を見るなり、嬉しそうに叫んで走ってくる。

「本当に！？」

私も自然と笑顔になって、駆けてくる。パウルの胸に向かって走って行く。恋人のパウルと会うのは一ヶ月ぶり。女優の卵の私は舞台の稽古で忙しかったし、同じく俳優の卵の彼も、オーディションを受けるのに忙しかったんだと思う。

ついに、彼も俳優としてデビュー出来るのね！ 私も今はほんの端役だけど、彼に負けないように頑張る！

私は嬉しくなって、ジャンプするようにパウルの胸に思いっきり飛び込んだ。

「わー！」

その衝撃で、パウルは私を上につけたまま後ろ向き倒れる。うつすらと雪が積もっていた石畳に、二人同時にドサツと転んだ。道行く人はチラチラと私たちを見て通り過ぎて行くけど、私は何とも思わない。

「おめでとう！ パウル」

私はパウルの唇に軽くキスして、彼の濃いブルーの瞳を覗き込む。少年のように綺麗に澄んだ瞳。一目見た瞬間から、私は彼の瞳に恋をした。もちろん今は彼の全てが好き！

私の顔が映ったパウルの瞳が微笑んでいる。私はそのまま彼の胸に顔を埋めた。ふわりふわりと雪が空から舞い降りてきて、私の体に積もっていく。

「ねえ、今夜はゆっくり出来るんでしょ？ 私のアパートに泊まれば良いわ」

私は少し甘えて彼に言った。パウルは、演劇学校時代からの仲間

とルームシェアして住んでいる。今夜は一人きりでのんびりと過したかった。

「あ……それが」

パウルは私の体をそつと支えたまま、ゆっくりと上半身を起こした。

「テテ……」

転んだ時打った背中を軽くさする。

「大丈夫？ 私の体重が重かった訳じゃないわよ。これでも舞台稽古で二キロも痩せたんだから」

私が念を押して言うと、パウルは笑った。

「まあね、雪で滑ったんだよ。僕が慌ててたからさ」

そうね、パウルはちよつとドジなところがある。でも、そこが可愛くて憎めないんだけど。私は微笑んだ。

「それで、返事は？」

しばらくパウルと見つめ合っていた後、聞いた。

「ごめん、今夜は忙しくて……その、これから色々準備や練習があるんだよ」

そうか、そうよね。大事な映画の撮影が始まるんだもの。これから忙しくなるわね。分かっていたこととは言え、私は内心がっかりして目を伏せた。

「私もクリスマスまで舞台があるから、また忙しくなるし。今日はやっと休みがとれたから一緒に過ごしたかったけど……仕方ないよね」

「ユーリエ、ごめん」

私はパツと顔を上げると、微笑んだ。

「良いのよ。大事な仕事なものね。ビッグチャンスよ、頑張っ
てね！」

「あ、うん。ありがと」

「クリスマスには休みとれるよね？ 私もしばらく休みになるの」

「クリスマス？……」

パウルの目が一瞬泳いだ。

「クリスマスって言うと、十二月二十五日だよね？」

「え？ もちろん」

まさかクリスマスも仕事？ 映画監督だってクリスマスには休み
たいはずよ。大スターもクリスマスは休みだわ。私は不安になる。

ここには家族もいない。パウル以外クリスマスをと共に過ごす相手
もいない。それに、田舎に帰るほど休みは長くない。

私はクリスマスにひとりぼっち？

「クリスマスにも仕事なの？」

思い切って聞いてみる。

「うーん……」

パウルは頭をかきながら考える。

「頑張ってみるよ」

「頑張ってみる？……」

意味が分からず、キョトンとした目で彼を見つめる。

「髭生やした方が良いと思う？」

突然、パウルが予想外の質問をした。

「髭？ 生やすつもりなの？」

映画の役作りのためかな？ パウルは童顔だから髭を生やすって
ていつのかしら？

「生やしている人が多くてさ」

「やめた方がいいわ。パウルには似合わないと思う」

「そう？ なら、やめとくか」

パウルは私の手を取ると、同時に立ち上がった。

「今から生やしても間に合わないと思うんだ」

「間に合わないって、どんな髭を生やすつもりよ」

私はパウルの顔を見て思わず笑った。毛深くないっていつても、
映画の撮影までにはまだ間があるはず。毛むくじゃらになっちゃっ

「まさか、サンタクロースみたいな髭を生やすつもりなの？」

冗談で言ったつもりなのに、パウルは真顔。

「サンタクロースの髭は白いもんな……」

私は吹き出してしまった。白髭のパウルも結構似合うかな？

食事くらいする時間はあると思っただけれど、パウルはその後すぐに帰って行った。これから仕事の打ち合わせがあるらしい。雪のちらつく夕暮れの街の中に、彼の姿は消えていった。華やかなイルミネーション、大きなクリスマスツリー、人々で賑わう街並み。明るい世界の中を一人歩くのは、どことなく寂しいけれど、パウルのことを考えるとほんのりと心が温かくなる。

パウルと一緒によく歩く商店街。その片隅に小さいけれどお洒落な宝石店がある。クリスマスの飾り付けをしたショウウィンドウ。チカチカと光る小さなクリスマスツリーの横に、ケースに入った指輪が二つ並んでいる。十字架模様の刻まれたプラチナのペアリング。少し高価だけど、パウルへのクリスマスプレゼントはこれに決めている。

男性用のリングの横には、同じデザインで真ん中に小さなダイヤのついた女性用のリングが置かれている。パウルに映画の仕事が決まったのなら、あのリングのプレゼントも期待出来そう。

ショウウィンドウの中でイルミネーションに負けないくらい、キラキラ光っているリングを見つめ、私は一人微笑んだ。

クリスマスまで後五日。

なのに、パウルは何の連絡もくれない。これまでは、どんなに忙しくても毎日電話かメールをくれていた。映画の撮影はそんな暇もないくらい、忙しいの？ 私は舞台も終わり、クリスマス休暇が終わるまでずっと休暇。

冷たい風が吹き抜ける街を、私は一人歩いて行く。街はすっかり白い雪に覆われて、クリスマスの雰囲気が一層高まってきた。それなのに……。何度かけても出てくれない電話、返事のこないメール。

私は白いため息をついて、携帯電話をバッグにしまった。

パウルの声が聞きたい。パウルに会いたい！

恋人達とすれ違い、肩を寄せ合い歩く二人の背を見ながら、私の足は自然とパウルのアパートへと向かっていった。こんな昼間、パウルがアパートにいる訳はないと分かっているけど、私は一人であることに我慢できなかった。

地下鉄に揺られ、下町にあるパウルのアパートに向かう。私は彼のアパートにあまり行ったことはない。彼が、同じ演劇学校出のカールと一緒に暮らしているから。私はカールが苦手だった。長身でとてもハンサム、少年の頃からモデルの経験があるらしい。その上、演技もなかなか上手いし、いつも自信に満ちている。

だけど、カールはプレイボーイ。ガールフレンドはしょっちゅう替わっている。彼がパウルの友達だなんて、認めたくない。

こんな昼間なら、カールもいないだろう、そう思っただけで階段を駆け上がり二階のパウルの部屋に向かう。パウルの部屋は階段を上がるとすぐ。

ドアが開いている！？

大きく開かれたドアを目にして、私は驚いて立ち止まった。パウルがいる。パウルに会える！

「パウル！」

私は残りの階段を急いで駆け上がり、ドアに向かって走った。

「あつ……」

「よお、久しぶり」

パウルじゃなかった。ドアのすぐ後には、カールが立っていた。

彼は、大きな荷物を抱えている。

「パウルは？」

私は部屋の中を覗いてみたけど、他には誰もいない。以前来た時より家具や物が少なくなっていて、殺風景になったような気がした。

「いないよ。ここ数日帰ってないようだな」

カールは口の端を上げてニッと笑った。

「俺も最近帰ってないんだ。今日久しぶりに帰って来て、荷物をまとめたところ。引越すんだよ」

「そう」

私は気のない返事をする。これからはカールに会わなくてすむと思うと、少しホッとした。それより、パウルのことが気になる。

「パウルは撮影に行ってるの？」

「撮影？」

「映画の撮影よ。パウルはオーディションに受かったんでしょ？」

新しい仕事が決まったって言ってたもの」

「オーディションに受かっただって？」

カールは鼻で笑った。

「彼奴が受かるわけないだろ。受かったのは俺だよ」

「え？」

心臓がドキッと脈打つ。

「でも、仕事が決まったって言うてた……」

「俳優を諦めて他の仕事に転職したんだろ。何度オーディション受けても受からないし、そろそろ才能がないことを自覚したんじゃないか？」

カールは笑顔で答える。整った顔立ちの甘い笑顔が憎らしい。

「じゃあ、カールはどこに行ったのよ。最近連絡つかないの」

「知らないな。新しい彼女でも出来たんじゃないかい？」

私はカールを睨み付ける。もう少しで彼の頬をひっぱたくところだった。

「映画の撮影は来年からだよ。大ヒット間違いなしだし、楽しみにしてくれ。将来のスターと知り合いつてことは有利だぜ」

私はムツとして顔をそむける。

「君もただの舞台女優で終わらずにすむさ」

カールは、荷物を抱えドアから出てきて鍵をかける。

「こんな安アパートともさよならだ」

そう言っつてカールは、チラリと私の方に目を向けて微笑む。

「今夜は予定が空いてるんだけど、俺と付き合わない？」

甘いマスクと甘い声、いつも女を口説いてばかり。でも、私はカールになんて興味ない！

「そんな暇ないわ！」

私はキツパリ言うのと、くるりとカールに背を向けた。

「君も変わってるな。冴えないパウルのどこがいいんだか？ 田舎出の純情な君達はお似合いなのかも」

後から聞こえるカールの笑い声を無視して、私は階段を下りていく。

「あつ、これパウルに渡しといてくれよ」

カールが近づいてきて、私にアパートの鍵を差し出した。

「今度から君が自由に使ってもいい」

カールは白い歯を見せてニコリと笑った。

「……」

私はカールの手から鍵を奪い取ると、走って階段を駆け下りて行った。

さつきより粉雪が激しくなってきた。

みるみる全てを白くしていく。私は寒さも忘れて、人々で賑わう街並みを駆けていく。

パウルはどこにいるの？ 何をしているの？

不安、苛立ち、恐れ。私はふと立ち止まる。目の前の広場には、大きなクリスマスツリーが飾ってあった。キラキラと光りながら、天まで届きそうなくらい空に向かって伸びている。私はバッグから携帯電話を取りだし、パウルに電話をかけた。いつもと同じ、何度も鳴り続ける呼び出し音。トゥルルルとむなしく鳴るたびに、私の体に雪は積もっていく。涙が溢れそうになり、電話を切ろうとした瞬間、呼び出し音が鳴りやんだ。

『もしもし、ユーリエ？』

私の心配をよそに、彼の声は明るく弾んでいる。走った後みたい
にハアハアと息を切らしていた。

『久しぶりだね、元気かい？』

屈託のない呑気な彼の声を聞いていると、だんだん苛ついてくる。

「元気かい？ じゃないでしょ！ 今までどこで何してたのよ！

何で電話に出ないの？ メールをくれないの？」

つい強い口調で彼にかみつく。

『ごめん、今仕事が忙しくて、寝る暇も』

「何の仕事をしているのよ！ オーディションに受かったなんて嘘
ばっかり！ 映画撮影なんてしてないじゃない！」

『ユーリエ、僕は何も』

彼の話も聞かず、私は続ける。

「カールなんかがオーディションに受かるなんて！ あの役はパウ
ルのはずだったのに！」

『カールは演技が上手いし良い役者になるよ。あの役は彼にピツタ
リさ』

「そんなだから、カールに馬鹿にされるのよ！」

私はパウルの人の良さに呆れてしまう。

「今どこ？ 話しがしたいから帰って来て」

『クリスマスまでは忙しくて帰れないんだ。その後で』

「忙しいって、一体何をしているの？ どんな仕事？」

『それは……今は言えない』

私が問いつめるとパウルは口ごもる。

「何故？」

『えーと……あ、ごめん、もう電話切っていいかな？ 仕事が終わ

ったら』

「もういい！」

パウルが電話を切る前に私は電話を切った。我慢していた涙がド
ツと溢れ出す。私の頭もコートも雪で真っ白だ。携帯電話をバッグ
にしまった時、パウルのアパートの鍵が手に触れた。

パウルのアパートになんか、二度といかないから！　パウルになんて、もう会わないから！

私は鍵を掴むと、目の前のクリスマスツリーに向かって投げつけようとした。だけど、手を振り上げただけで、鍵を捨てることは出来なかった。クリスマスツリーがあまりにも綺麗で、優しかったから。パウルのことを忘れてしまっなんて、まだ出来ないから。

私は、鍵を握りしめたまま肩を震わせて泣いた。クリスマスは嫌い。華やかで美しくて温かくて……。ひとりぼっちでいるには、あまりにも悲しすぎる。

ずっと憧れていた、女優になることを。いつの日か、大きなスクリーンに映し出される自分の姿を思い描いたりしていた。小さな田舎町から大都会に出てきて、演劇学校にも通った。そこでパウルと出会って恋に落ちて……。

パウルはセリフをなかなか覚えられなくて、何度もNG出してよく叱られていたけれど、私は彼の一生懸命な演技が好きだった。パウルも子供の頃から役者になりたいって言ってた。人を楽しませることが好きなんだって……。それなのに、簡単に諦めてしまうの？

私もまだまだ下っ端で、舞台の脇役の一人でしかないけれど、夢は諦めていない。いつか、パウルとも共演したい。でも、それはもう叶わない夢？

吐く息が白い。雪は止んで、今は月明かりに照らされている。

今日はクリスマス・イブ。賑やかな表通りを通り過ぎ、私は一人パウルのアパートの階段を上がっていく。友人達に誘われたパーティーも断った。

クリスマスはパウルと過ごしたいから。いないと分かっているけど、

彼のことを側で感じていたいから。

私はカールから受け取った鍵で、アパートの鍵を開ける。人気のない冷え切った室内。パウルが戻っている、という微かな期待は裏切られた。それでも良い。クリスマスをここで過ごしたら、田舎に帰ろうと思っていた。

パウルと過ごす、最後のクリスマスだから。

私は、持ってきたクリスマスキャンデルをテーブルに立て、二人分のシャンパングラスを置いた。

「これで忘れられそう」

二つのグラスにシャンパンを注ぎ、グラスを片手に持つ。小さな泡が弾ける透き通ったシャンパン。私は二、三度グラスを揺すって口に含んだ。甘酸っぱい味が口に広がる。

「パウル……」

手にしたグラスをパウルのグラスにカチンとつける。静まりかえった部屋で、揺れるキャンドルの炎を見つめっていると、涙が頬をつたって流れた。

パウルのベッドの枕元に、クリスマスプレゼントを置いた。お気に入りのペアリング。お店のショウウィンドウに、今は片方の女性用のリングしかないはず。

リボンで綺麗に飾られた小さな箱を見ながら、私はまたため息をついた。すぐに帰ろうと思ったけれど、結局なかなか帰れなくて……いつの間にか真夜中を過ぎていた。目がさえて、ちっとも眠くない。

私は窓辺に寄り添って、ぼんやりと寝静まった街を眺める。夜空には星が煌めいて、月明かりが白く積もった雪を青白く照らしている。幻想的で神秘的な光景。パウルと二人なら、もっとロマンチックな気分になっていたのに……。

そんなことを思いつつ暗い空を見上げた時、空の向こうから何かが飛んでくるのが見えた。

「何？……」

思わず身を乗り出して、窓から空を眺める。それは、飛行機ではなく、ゆっくりとなめらかに空を横切つて来た。

「あっ」

次第に近づいて来たそれは、音もなく隣りの家の屋根に止まる。

そりとトナカイ！？ 私は啞然としてそれを見つめる。サンタクロースの存在なんて、もうとつくに忘れていた。幼い頃、あんなに会いたかったサンタクロースだけど、今は、クリスマスに仮装したサンタしか思いつかない。

けれど、私の目の前には、本物のサンタクロースが！ 何度も瞬きして、目を凝らして見つめる。確かに、トナカイのそりに乗ったサンタクロースが、大きな白い袋を抱えていた。そして、サンタクロースが、今まさにそりから降りようとしている。と、サンタがバランスを崩してよろめいた。

「危ない！」

雪で滑ったのか、ズルズルと屋根を滑り落ちてくる。私はハラハラしながら彼を見守った。屋根から転げ落ちそうになるサンタに付き、トナカイたちが慌ててサンタの元へ走り赤い服の端をくわえた。

屋根から落ちそうになるなんて、何てドジなの？ 私はおかしくなって笑った。彼は新入りのサンタクロースなのかもしれない。

サンタクロースの帽子がとれて、屋根から落ちていく。サンタは手を伸ばして帽子を取ろうとしたけど、間に合わなかった。サンタクロースが顔を上げ、月明かりに映し出された彼の顔が見える。

「あっ！」

私は驚いて両手に口をあてた。そのサンタクロースの顔は、とてもよく見慣れた顔。一番会いたいと思っていた人。

「パウル？……」

何故彼がサンタクロースに？ これは夢なの？ 訳が分からないまま見つめる私の前で、サンタクロースのパウルは体勢を立て直し、

大きな白い袋を肩に担ぐと、煙突の中に消えていった。

それは一瞬の出来事。もう一度目をこすって屋根の上を見た時には、サンタのパウルもトナカイ達もそりも消えていた。辺りは何事もなかったかのように、静かな夜の街が広がっている。それでも、温かな幸せな気分が私の心を満たし、さっきまでの惨めな悲しい気持ちはなくなくなっていった。

もしかして、パウルの新しい仕事って？……。

私はクスリと笑うと、窓辺から離れた。クリスマスが終わるまで忙しいはずよね。馬鹿だな私って……パウルの話をちっとも聞かないで、一人で勝手に怒ってた。パウルのこと信じてなかった。穏やかな気分になったせいとか、急に眠気が私を襲う。

「ごめんなさい、パウル」

あなたの帰りを待ってる。小さく欠伸をして、私はパウルのベッドに身を横たえた。とても素敵な夢を見れそうな予感がする……。

「こんなところにいたのか」

夜明け前、もうじき空が白み始めようとした時、窓辺に一人のサンタクロースが降り立った。彼は、ベッドでぐっすりと眠っているユーリエの元に近づいて行く。

「随分探し回ったんだよ。まさか、ここにいるとはね」

ニコリと微笑んだサンタは、彼女の左手をそっと持ち上げ、その薬指にリングをはめた。

「メリークリスマス、ユーリエ」

サンタクロースはユーリエの手の甲に、軽くキスする。彼女のリングのダイヤがキラリと光った。

「明日には戻って来れるから、それまで待っていて」

日が昇り始め、外で待っていたトナカイ達が鳴き始める。

「二人きりで、一日遅れのクリスマスをしよう」

そう言つと、サンタは急いで部屋を出て、トナカイ達の待つそりに飛び乗る。穏やかなクリスマス朝の光に包まれながら、そりは空に向かって飛んで行った。

サンタクロースの夢を見た。

彼は、一晚中夜空をソリに乗って駆け回り、人々にプレゼントを運んで、一番最後に私の元に来てきた。子供の頃に夢で見たサンタクロースは、白い髭を生やした体格のいいお爺さん。

けれど、彼は髭も生やしてなくて、とても若いサンタクロースだった。

明日は十二月二十六日。サンタクロースも、ようやくクリスマス休暇がとれるはず。私だけのサンタと過ごす、二人きりのクリスマス。あなたと一緒になら、毎日がクリスマスね。

私は微笑むと、薬指のリングにそっとキスをした。

了

(後書き)

さっきまで修正していました…^^; クリスマスまでに投稿出来るかどうか不安でしたが、なんとか間に合いました。

他の皆さんはどうでしょうか？ クリスマスの恋愛物は初めてです。暖かく優しい気持ちになれるようなストーリーを目指しました。お題は「クリスマス」ですが、「雪」「キャンドル」「クリスマスツリー」も入れて、さりげなく三題漸にもしてみました。^^; では、素敵なクリスマスが訪れますように…。

Merry Christmas!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3203b/>

一日遅れのクリスマス

2010年10月8日15時33分発行